

島田正治

三月下旬、一週間ほどグアナファート行きをした。今回は大作を描くが目標であったから、現地へ着いて、次の日からさっそく制作にとりかかった。描くはグアナファートの全市街がほぼ一望、見渡すことができるピピラ像の立つ丘からである。今から三十年前はミラドールと呼ばれる展望台とみやげ屋が十軒ほどしかなかったのに、現在はこの丘へ登ってくるのに便利な登山ケーブルカーまでできた。乗れば頂上まで五、六分とかからない。以前は急な階段をあえぎあえぎ登った。息苦しくなった。標高二千メートル、当然だろう。空気もうすい。途中で何度か休み下界を眺めた。

\*-----\*

ピピラ像のある展望台には朝からいつも観光客でごったがえしている。こんなところで描きはじめてらたいへんだ。物珍しさも手伝って人だかりに合ってしまう。これはもう三十年も前の話だが、描き出したら人が集まりはじめた。落ちついて描けるものではない。三十人ぐらいいたと思う。やがて警官がきて整理をしてくれて、描くわたしの前に立ちはだからないよう注意した。やはりこの時のにがい経験は、その描いている画仙紙の上を一匹の犬が通り過ぎたことだ。おかげで犬の足跡が白い紙の上に残ったのである。

そんなわけで大きいもの描く場合は、かっこうのいい条件のところを探し見つけなければならない。で、ミラドールから五十メートルも離れたところに、丘の崖っぷちに新しい家が何軒か並んでできた。この裏側に幅二メートルほどのコンクリートの道があり、ここはほとんど人が通らない。ここだと決めて道具を出して墨をすりはじめたら、こんどは犬に吠えられる破目となった。こんなところへ人が座りこんだから、きっと犬もびっくりしたのではないかと思う。けっこう長時間吠えて威嚇していたが、犬もとうとう疲れてやめてしまい静かになった。

「パノラミコ グアナファート」これはここから見下ろす光景を二日かかって画仙紙二枚横つぎ、長さにして二メートル七十センチとなった。畳二枚分ほどの大きさといってよい。描くに腰は痛くなるやら、手指はこわばって痙攣するやら、とにかく悪戦苦闘、最後は根気と執念とさえ思えた。

\*-----\*

そもそも横長大のメキシコの風景を描くようになったきっかけはこうだ。たしか二回目あたりの渡墨の折、このグアナファートに留学生としてきていた藤川汎正氏と知り合った。わたしが描いた絵を見せると、いろいろ批評してくれた。

あるとき、丘の上からの眺めの絵に、せっかくここまで描いたのだから、この絵の右側へのぼして描いたらと言った。なるほどと思い、そのように描いていくと、こんどは左の方も見たいという。つぎの日、それを実践した。それが日を重ねること一週間に及び、まことに七枚つぎの長大作となって完成、まさに大パノラマの俯瞰図ができたのである。汎正の助言によって横長五メートルの絵になった。

その年開いた日本での個展には読売新聞が長大絵巻図として「水墨画の新天地開く」というタイトルで絵の写真入りで美術欄に書いてくれた。以後、メキシコでの制作テーマのひとつになって毎年制作した。(つづく)